成長の遅れたアユ種苗の放流魚としての評価－Ⅱ

鈴木　隆夫

◆背景・目的

昨年度、魚の飼育過程で、成長の悪い“ビリ”と、メインの放流群である“通常群”の、河川での放流試験と水試場内でのなわばり形成試験を行った。その結果、河川では通常群の方が釣果と体サイズの伸びが良かったものの、飼育池でのナワバリ形成試験では、両群に差は無かった。そこで、再度確認のために本試験を行った。

◆成果の内容・特徴

- 11月に琵琶湖で採捕され、飼育中に4回の選別を経て小型であったアユをビリ群(体重7.7g)とし、3月に採捕され2回の選別を経た通常群(体重7.9g)を、約5千尾ずつ5月26日に愛知川へ放流した。放流後は、友釣りによる釣果と漁獲サイズを調べた。冷水病の影響と思われる口部周辺の奇形が、軽微なものを含めるとビリ群で39%、通常群で6%認められた。
- 放流群の50尾を冷水病菌で浸漬攻撃し、生残率を調べたところ、対照区の16%に対して、通常群94%、ビリ群96%であった。
- 釣獲調査では、解禁日(6月24日)～7月中旬までは、ビリ群、通常群に大きな差はなかったが(比率1:1.4)、それ以降は通常群の方がよく釣獲された(比率1:3.7)。9月以降の投網調査でも、通常群の方が多く漁獲された(比率1:2.7)。体サイズは、通常群がビリ群に比して漁期後半大きな伸びを示し、8月には有意な差が認められた。
- ナワバリ形成試験は、群の単独および混合放養した飼育池で、ナワバリ形成尾数を計数することで行った。その結果、両群のなわばりアユ出現率に差はなかった。
- 放流試験で、通常群の釣果がビリ群より上回った原因として、ビリ群の成長の悪さや口唇部周辺の奇形がかなり多く、生残率が低下したことが考えられた。

◆成果の活用・留意点

- ビリ群のナワバリ形成率は、通常群と差はなかった。しかし、成長は通常群の方が良いことから、種苗の質としては、やはり通常群が優れていると考えられる。